

いたことを示している。昭和三五年まで徒弟制度を継続したものも一社ある。

従業員組合の存在を報告したものは、本調査中には全くない。

（）、「」を始めた重機 特に注目される動機は倒産した企業のあとを引き継いだというのが十二社中三社もあることである。銀鈴荘製パンの石川克己氏の思い出の中、大王味明二會長（一二、二千五百六十四）

は豆腐屋に転業、一軒は廃業したとあるのを見てもうなづける。パンを始めた動機の中で菓子製造から転向したというのも二社ある。

終戦後の開業の動機は、他府県と同じく、粉の配給が多かつたから、パン業が有望と考えたから、独立の企業だからなどが多い。

「北海道」パン業界の現状

北海道全土には現在なお数百軒に上る中小パン業者が残つてゐるが、最近急速に生産の機械化・大型化、資本の集中、設備の拡張が進み、道内の製パン業界は変貌してゐる。近年新設された新工場の主なもののみをあげても、日糧パンの釧路工場、北沢製パン（夕張）の新工場、美河屋（旭川）の新工場、函館の毎日パン、精養軒の新工場などがある。

北海道最大のパン企業体に発展した日糧パンは、現在道内のパンの四〇%以上のシェアを占め、売上げ約五〇億円だと伝えられる。

小樽パンは創業が古く、経営も堅実で、各地で着実に伸びている。函館市の老舗精養軒も先年新工場を建設して発展している。

毎日パン（函館市）は吉村産業、高砂食品、トモエ食品などと企業合同したもので、堅実に営業をのばしている。この外夕張市の北沢製パン、旭川市の美河屋などが現在北海道内の主要な製パン企業である。

北海道のパン業界は今後解決しなければならない多くの課題を抱えてい
る。道内のパン販売競争が烈しくなり、特に函館地区では毎日パン、第一
製パン、精養軒などの競争が激化している。日糧パンの動向も道内パン業
者の注目の的だが、同社は今後は大幅の設備投資を行なわず東京工場に重
点をおく方針と聞く。学給パン加工販の引上げ、市販パン価格の改訂など

も道内パン業者の重要な問題であり、東京の山崎パンの北海道進出の噂についても道内パン業者は強い関心を示している。

北海道の部(一二社)

二、東北地方のパン概見

一、沿革

鎖国以前の基督教のひろがりは全国的であつた。パンはキリスト教と表裏一体の関係でひろがつたから、当時東北でも若干のパン食がおこなわれたものと推定される。特に伊達政宗は慶長十八年（一六一三）に支倉常長

以下の使節団をローマとイスペニヤに送りだしているから、この使節団が

帰国した元和六年（一六二〇）ごろ仙台を中心に若干のパン食が行なわれただろうと推定されるが、当時は禁教時代であつたからこれが普及の条件はなかつた。

幕末の安政元年（一八五四）には函館が開港され、以後この地方の警備を伊達・津軽等の東北大藩が交代で行なうようになつた関係上、そのころからパン食についての知識が、この警備兵を中心にして東北にもたらされたであろう。また明治維新直後には諸藩がきそつて外人を雇つて西洋文化の導入に努めた。したがつてこの時代に城下町を中心にパンがつくられるようになつたが、それは西洋人のためのパンであつた。東北地方は奥羽同盟といふかたちで官軍と対立したので、その影響でお雇い西洋人も数少かつたのでこの点にもみるべきものがない。

従つて東北のパンはまず明治以後のものとみてよいが、その普及の尖兵的役割を演じたのは教会とミッション・スクールと、官立の大学・高校・

東北地方のパン概見

(註) 人口は昭和四〇年十月一日現在

師団などであつた。

そこで教会の東北進出状況をみると、明治八年—弘前公会、明治十三年

仙台 盛岡 花巻 赤間関各教会 同十四年天童教会 十五年八戸教会
十八年石巻教会といふ順序であり、ミッショントスクールは明治十八（一八九五）年に仙台東華学校、東北学院、宮城女学校、弘前女学校と統出している。また鎮台（師団）が仙台におかれたのは明治四年であつた。なお仙台に第ニ高等中学校がおかれたのは明治十九年であつた。

これらの教会やミッションスクール、軍隊、官立大学、高等学校には外人が関係していたから、これが東北地方にパン食文化を導入したことはうたがいない。そしてその中心が教会、ミッションスクール、官立学校、真台の中心であつた仙台であつたことも察するに難くないであらう。

昭和四二年（一九六七）現在の東北地方のパンに関する資料を示せば次の通りである。

二、現況

昭和四二年（一九六七）現在の東北地方のパンに関する資料を示せば次の通りである。

これでみると東北の総人口は全人口の九・三%であるが、パンの年産高比率は七・三%である。そしてその内訳をみると市販パンの比率は六・七%であり、学給パンの比率は九・五%である。これは市販パンの比率が非常に低いことを意味しているが、その原因がパンの主な消費地域である市部の比率の低さにあることはうたがいはない。

この点は総人口比率九・三%にたいして市部人口比率が七・一%であり郡部人口比率が一四・三%だという事実によつてうらづけられている。

つぎにその市部のうちの代表的都市のパン食率をみるとパン食率が高いのは青森市と秋田市であり、もつとも低いのは山形市である。

業者数の全国比は八・六%であるが、その数がもつとも多いのは福島県であり、もつとも少いのは青森県である。問題はその原因如何であるが、青森県の場合は企業の整備合同の成果が現れているとみるのが至当であろう。企業の生産規模をみるとオープン能力三〇〇kw以上の企業は六工場であつて、その他の約六七〇工場はすべてそれ以下の零細規模工場のみである。

六工場のうち青森市の工藤パンと仙台のとらや及び平塚パンは日本パン工業会の会員である。なお最近仙台市に製パン高日本一の実績をもつ山崎パン仙台工場が出現した。

青森県パン業界の歴譜

一、年産高 六三、〇一〇屯
二、市 部 八市八三万人

三、調査 三社（青森七、八戸三、弘前四、其他一七社）

イ、平均年令 五三才

ロ、業態別 卸を中心とするもの一六、小売を中心とするもの一五、学給パン兼業一三社である。

ハ、創業 明治創業が三社、大正創業が二社、のこる一六社は昭和創業であるが、そのうち戦前派は八社でのこり一八社は戦後派である。ところがその戦後派の三分の一は麦類が自由販売になつた昭和二七年前後の創業である。これは統制から自由への移行期が業界の一つの大変な分岐点であつたことを示すものとみるべきであろう。

一番の老舗は明治三〇年創業の岡田製パン（野辺地）であるが、このような田舎町に日清戦争直後に酒種生地のアンパン屋が出現したということは、当時この地方にまで既に相当パンが知られていたことを示すものであるが、二番目に古いのは明治四三年創業の留目パン（南部町）と阿部パン（青森）であり、その次に古いのは石田パン（弘前）の大正五年と冬パン（弘前）の大正十年である。

このうち留目パン（南部町）主銀太郎氏は往年を回顧して次の通り語っている。

「私がパンの仕事をはじめたのは、七〇年近い昔ばなしになりますが、よい酒だねをつくるのに苦労しました。オリエンタルライーストを使いはじめたのは昭和七年でした。石窯を電気窯に切りかえたのはパンが自由販売になつた昭和二七年でした」と。

また昭和六年創業の木立パン（青森）は往年を回顧して「昔といまをくらべると、いまの仕事は夢のように楽ですが、もう少し金のかからない仕事ができるではないか」と語つている。

ニ、技術系統 木村家系統一、九十五年系統一であるが、井上パン系統二となつてゐるのは、かつてはこの地方の中心が井上パンであったことを示すものであろう。
ホ、年代 三代目が二人、二代目が七人、のこる二三人は初代である。
ヘ、発酵法の推移 阿部パン（青森）はホップだね、酒種を昭和七年からイースト種に切りかえているが、木立パン（南部）は昭和十五年までその古い製法を続けていた。これは製法の切りかえには時間がかかることを示すものである。

ト、パンの種類別普及順位 これによると、まず菓子パンが普及し、ついで食パンが普及し、それから直焼パン、スコートロールという順序になつてゐる。

しかし創業年代が新しくなると、これら四種類のパンを一齊につくらないと商売にならないよう時勢が変つてきたことを示してゐる。

チ、パン焼窯の推移 石窯からひら窯にうつり、それから電熱式固定窯にかわり、トンネル窯乃至廻転窯にうつり、最後にオイル窯が頭を上げかかっている。

目をひく点は昭和二十五年まで石窯が二軒の企業体で使われていたことと、運行窯がパンが自由販売になつた昭和二十七年ごろから進出し、昭和三七年ごろから急に増加していることである。これはこのころから次第に労働力不足が目立ち生産性向上の必要にせまられた為とみられる。

リ、その他の機械 パンが自由販売になつた昭和二七年から急にミキサー、デバイダー、モルダーがあえている。これにたいし自動式包装機は昭和四〇年前後から急にふえている点に特色が認められる。

ヌ、配達方式 配達方式の主力として貨物自動車が登場するのは、やはりパンが自由販売になつた昭和二七年前後からである。従つてそれ以前は箱車と自転車またはリヤカーが配達機関の主力であった。こういう点からいつてわかることは貨物自動車の登場によつて配達行動半径が拡大し、それがパン企業の近代化、機械化を促す一大原動力となつたということである。

ル、雇傭関係 徒弟制度、年季奉公制度に関する伝統は適確につかみにくく、これは戦前のパン企業の多くが室内労働や親戚、縁者などによつて形成されていたからであろう。労働組合が昭和三十九年に、青森、八戸弘前の三大都市で一齊に発足していることは注目すべき事実である。

オ、パンの種類の推移 データー不足の為傾向をつかみ難い。

ワ、企業合同 企業共同体が二社（栄作堂、岡田パン）存続していることも注目すべきことである。

○○人以上の大手パン企業であり、このような大手が青森のような中都市に出現したということとは、将来中都市にも大型企業が出現することの可能性を示唆するものとして注目されるところであろう。

ヨ、パン屋をはじめた動機 青森第一のパン屋となつた工藤パンは「パンを主食とする西洋人が、米を主食とする日本人よりも体格がすぐれてい」と報告している。

タ、パンの値段の推移 昭和十年現在の食パン一斤当たり価格は最低十錢最高十六錢で十二錢が最も多かつた。アンパンの場合は大正元年一錢、昭和一年になると、それが一錢、五錢にあがつてはいるが大部分は五錢売りであつた。

青森県の部 (三二名)

昭和 七 長 作 堂	社 名	所在地	代表者	年令	創業年		
					代 目	販 売 形 態	技 術
昭和 六 木立 パン	虎屋パン舗	青森市	斎藤 清一	四 二 才	五 九	卸 直 売 学 給	系 統
昭和 六 木立 パン	栄作堂本店	青森市	野坂 カネ	五 七	五 九	井 上	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	下斗米長吉	五六	四 七	一 一 二 一 一 一	三 三 三 一 一 一
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	青森市	六 三	七 四	○ ○	井 上
昭和 六 木立 パン	木立 正	八戸市	野坂 カネ	六 三	四 七	○ ○	井 上
昭和 六 木立							

岩手県パン業界の歴譜

愛國

一 岩手県のパンのあゆみ

地元に南部駒の産地をはじめ、古い歴史と伝統に培かわれた古都盛岡市を擁する岩手県ではあるが、パンの歴史面では一体どうだろうか。この地域でも他県と同様に明治以来の動きを記録的に立証する史料は、残念ながらあまり残されていない。

岩手県下でもいわゆる戦前派の筆頭格、創業歴五十年以上の看板を誇る盛岡市宮田パンの存在。また現在この世を去つて十年近くになるが、かつて同県下で横沢パン店を経営し、明治時代の末期から大正時代、現在の花巻から一の関、宮古市あたりを拠点として、製パン技術の指導と、パン食の普及推進にあらんかぎりの情熱を傾け、東奔西走席の温るを知らない活躍振りをしめし、県下パン業界の発展に大きく貢献した横沢高義氏の存在。また四年前死亡し、いまでは過去の人になつたが、これまた明治時代の末期から大正を経て昭和時代に至る長期間、主として県下農協関係を中心にパン食の普及推進に努め、農村方面の需要喚起に大きな成果をあげた高橋善之助氏の存在。これら諸先輩の残した足跡のあとを振り返り、岩手県下パン業界のあゆみにおもいを致すとき、そこにはすでに過去の栄光をもの語る『岩手県のパンの歴史』が着々として築かれてきたことに、あらためて深い感銘を覚える。

すなれど以上のとく、県内パン業者間の個人的な活動やその動きの足跡から観察すると、岩手県のパンはけつして後進的なものでなかつた所以があきらかに諒解される。だが一方県下パン業界としての組合活動、団体活動という点では一体どうであつたか。現在あきらかな記録に残る文献に照應するも、その意味では東北六県のなかでも、岩手県はたしかに一步おくれをとつてゐる事実がよくわかる。

加盟した組合は東北地方で青森食パン合同組合（代表、越野謙三）、宮城県製パン連合会（代表、針生次郎）、仙台製パン業組合（代表、中村猛）、秋田共同製パン工場（代表、鈴木重昌）、山形県製パン工業組合（代表、森慶司）、福島県製パン工場（代表、斎藤豊後）等諸組合の名が発見されるも、岩手県下のばあいは残念ながら、任意組合もなければ小組合も存在せず、したがつてこの全パン連なる全国団体からは、完全な組合未結成、組織洩れの形となつてゐる。

しかしながら、昭和十六年度現在の各都道府県別製パン用小麦粉加工実績（註も全パン連調査）をみると、東北地方各県における年間加工袋数は左記のような数字となつて記録されている。

青森県 年間加工袋数
七、五〇〇袋

一九、八〇〇袋

岩手県

一九、八〇〇袋

宮城県

五〇、一〇〇袋

秋田県

一七、一〇〇袋

山形県

二一、一〇〇袋

福島県

四〇、九〇〇袋

以上の数字にてらして明瞭のとおり、岩手県のパン年間加工実績は、青森県の七、五〇〇袋、秋田県の一七、一〇〇袋をうわまわる一九、八〇〇袋といふ東北六県で第四位の座を占めている。それ故岩手県のパンは組合活動、団体活動面では他県に一步おくれをとつたとするも、県内業者間の生産活動面ではこの時代から、かなり活発な動きを展開してきたものとみておそらくあやまりはない。

二、岩手県下組合活動面の概況

現在岩手県パン工業組合の理事長である松坂勝郎氏の調査によると、岩手県で県一本化の岩手県委託製パン工業協同組合がはじめて結成されたのは、昭和二十四年十月二十二日のことで、同組合理事長に内藤万二郎氏が選任された。当時組合員として参加した業者間の総数は大体四十名程度のものであつた。

しかばなぜ一体パン業者間に独自の組合機関を結成するにかく手間どつたか？それは他の諸県と同様に、もともとパンは菓子の一部であり、パン屋は独立した一個の企業として認められず、菓子工連の支配下に拘束されていたからで、したがつて当県下においても菓子業者間の勢力は圧倒的に強く、パンは菓子の居候格としてその下働き程度の境遇を強いられる以外他に立つ瀬はなかつたからであつた。

この時代岩手県菓子業界のリーダーとして支配権を掌握したのが、かの有名な梅津佐助氏であつた関係から、パン関係業者がこの現状から脱皮して、主体性を確立し、行動的にも独立独歩の道をあゆむということは、まさしく不可能に近かく、だからいきおいそうした環境のもとに呻吟することを余儀なくされた。これがつまり当県下でパン組合を結成するにおくれをとつた根本原因であつた。

しかしながらその間、県下パン関係業者は、昭和十七年以降食糧管理法の制定にはじまるパンの切符配給制、中央食糧當團の成立と地方食糧當團の発足。パン類を含めた主要食糧の當團直轄統制実施、そして日菓工連から分離して、道府県単位の工業組合を結成するという動きのなかで、当県下のパン業者も戦局の拡大発展にともなう戦時非常体制に即応し、組合は政府の下請団体としての統制力を一段と強化する目的で、政府の至上命令による統制組合への移行した。

すなわち、昭和十八年九月からはじまる全国業界一斉的な統制組合への改組作業進行とあいまつて、東北地方でも福島、宮城、山形、青森、秋田岩手の六県が足並みをそろえ、パン統制組合を結成する。当県ではパン統成と同時に菓子業界のリーダー梅津佐助氏が同組合理事長に就任、パン統行政の采配を直接振うことになつた。

そうなると形のうえでは県下パン関係業者が日菓工連の支配下から脱皮して、独自のパン統を結成し、パン業者としての主体性を確立したようにも目受けられるが、じつはさにあらず、すでに前述したとおり、当県下においては一部の特定業者を除く他の大部分は、菓子屋がパン屋であり、パ

ン屋は菓子屋であり、つまりは業態ことなれ一身同体、つまりは両頭の蛇という姿がその実態で、実際には岩手県パン統というも内容的にはパン、菓子混血体の共同世帯で、パン関係業者間だけのひとり舞台ではなかつた。

やがて岩手県パン統体制のもと、問題の企業整備がはじまる。その模様は残念ながら記録的に明確にされていない。それ故当県パン業界の歴史的記録としては不備ながらも、その間の模様は一応省略するとして、以来戦時下非常体制に対処して配給パン類の生産加工に専念し、戦う県民の食糧確保に万全を期するも、一方戦局は日に重大化の一途をたどり、遂に日本軍の無条件降伏とあいまつて、遂に終戦を迎える。そして昭和二十一年五月現在の時点で、東北六県のパン業界再建状況（全国製パン協議会調査）を見ると、戦中のパン統にかわる戦後の新しい組合組織の結成に着手、この目的を達成したのは、青森、宮城、山形、福島の四県だけで、岩手、秋田の両県は組合未成立の形となつているのがその現状であつた。

そうした組合未成立状態から脱皮して、県下パン関係業者は、岩手県粉食商工業協同組合を結成、理事長に再び梅津佐助氏が就任、事務所を盛岡市看町岩手県食糧営団内に設けて、戦後のあたらしいパン食時代に對処する新体制の確立に成功したのが、昭和二十一年度の時代へ移つてからのことであつた。

大体以上が昭和二十四年十月、岩手県委託製パン工業協同組合が結成される以前の動きの模様で、現在の松坂勝郎理事長が述懐するとおり、岩手県下のパン関係業者が菓子関係部門の支配下から脱皮して、正真正銘の“パン屋の組合”らしい組合を業者自身の手で結成したのは、このときがそもそものはじまりであつたといえる。

◎ 以来現在に至る組合経過概況

やがて昭和二十六年八月二十三日、県委託製パン工業協同組合は、岩手県パン工業協同組合に改組され、理事長はおなじく内藤万二郎氏が担当、組合員数も四十名前後と變るところはあまりなかつたのであるが、しから

ばなぜ組合自体の改組を必要としたか、という点だが、そこには次のように

な問題が介在していたからであつた。

というのは、終戦直後の混乱時代ならともかく、すでにその後六年間も経過した現状のもとで、「組合名に“委託”の二字を踏襲するのは、いまの実情から勘案するも適当でない。それ故委託の二字を抹消し、現状にふさわしい組合名に改めるべきだ」という意見が、組合関係者間でも圧倒的に強く、そのいきおいに乗じて県パン工業協同組合に名称変更した。これがその間の事情で他に難かしい問題があつたとか、内紛問題があつたとかそういうことからではなかつた。

かくて昭和二十九年十月十二日には内藤万二郎理事長が退任、二代目理事長に松坂勝郎氏が變つて選任された。この時点で同組合を構成する組合員の県下主要地域における分布状況を参考までに記すと次のとおり。

盛岡市地区 十三名（学校給食パン委託加工々場を含む）

岩手郡地区	八名（
花巻市地区	八名（
釜石市地区	九名（
宮古市地区	十一名（
下閉伊郡地区	二十一名（
九戸郡地区	五名（
北上市地区	七名（
和賀郡地区	五名（
稗貫郡地区	三名（
一ノ関市地区	三名（
水沢市地区	二名（
久慈市地区	五名（
大船渡市地区	三名（
陸前高田市地区	二名（

上閉伊郡地区	二名（学校給食パン依託加工工場を含む）
遠野市地区	四名（）
西磐井郡地区	一名（）
紫波郡地区	一名（）
気仙郡地区	二名（）
稗賀郡地区	一名（）
江刺市地区	一名（）
胆沢郡地区	一名（）

（註）なお以上組合員の内、農協関係製パン工場（主として学校給食パン委託加工専門）が十一工場含まれているのが、岩手県の特殊事情として注目に価いする点である。

かくして岩手県下のパン業界は昭和二十九年十月以来、概ね以上のことが組合体制で業界の発展とパン食の普及推進に努めてきたのであるが、やがて昭和四十一年六月二十六日、従来の岩手県パン工業協同組合を再び組織変更し、あらためて組合名を岩手県パン工業組合と改称し、理事長に松坂勝郎、副理事長に高橋盛恵（オリオン製パン）、同中沢仁寿雄（日進堂）専務理事に宮田元男（宮田パン本店）、常務理事に斎藤茂（一の関食品工業）、野村祐徳（野村屋）、高杉与次郎（高杉商店）等々の諸氏がそれぞれ就任、組合員総数一〇九名（昭和四十三年十一月現在）という新陣容で体制を整え、現在に至つてはその間における動きの概要であった。

一体以上が岩手県パン業界歴譜の概況である。

宮城県パン業界の歴譜

標記調査にあたり、宮城県製パン協同組合より寄せられた県下製パン業者個人調査表を対象とし、その内容を分析した概況を記すと次のとおり。

一、調査対象（組合管轄関係四十九社）

内訳

桃生郡一、石巻市三、玉造郡二、古川市四、登米郡六、仙台市九、志田郡二、白石市一、栗原郡三、牡鹿郡二、柴田郡三、刈田郡一、遠田郡二
塩釜市一、加美郡一、伊具郡一、名取市一、黒川郡一、氣仙沼市一、山元町一。
（以上 四十九社）

二、調査内容

(1) 業態

調査対象四十九社の業態を分類すると、卸売に重点をおくものの二十四社直売を中心とするもの二十一社、卸と小売を兼営するもの四社に大別され、企業形態としては学給パンの委託加工を含めた、卸売業者が圧倒的多数を占めているのが、本県パン業界の特長だと見受けられる。

しかも調査対象四十九社の内、学給パンをやらず、直売専門形態の業者はわずか四社に限られ、残余の四十五社は全部学給パンの委託加工を担当し、生産施設状況も別表個人業態調査表にてらして明瞭のように、運行窓等を中心とした流れ作業による大規模生産システムを探るメーカーは比較的小なく、大部分の業者は電熱窯にモルダー式のいわゆる中小企業的生産施設を踏襲、その掌にあたつては現状のようである。

(2) 創業

東北六県を代表する近代的大都市、仙台市を地元にもつ宮城県は、明治草創時代からの古い創業歴をもつパン業者も、相当存在してしかるべきはずであったが、しかし本表調査によると昔の時代から伝統の看板で鳴らした、仙台市東一番丁の日進堂を始めとする、名門老舗の姿はみられず、その内訳は明治十九年の創業歴をもつ伊藤製菓（宮城県刈田郡蔵王町、代表者伊藤庄吉）の一社だけとなつてはいる。

続いて、大正時代の創業歴をもつもの、全部で十二社、残る三十五社はいずれもみな昭和時代に移つてからの創業者で、本県パン業界も他府県のばいと同様に、移り變る時代の流れと環境の変化に支配される業界流転の様相は常に激しく、絶えず繰り返され、それにともなう業者間の顔触れにも変化のあることが、このような事例に微してもあきらかに窺い知ること

とができるのである。

しかし、そうした実態のなかで、唯だ一つ異例中の異例とみられるものに、これは明治の草創時代どころか、十七世紀末から十八世紀初の五代将軍綱吉時代の元禄十一年という時点で創業した、合資会社蛸屋老舗（仙台市長町、代表蛸忠治（十代目）があり、しかもこの老舗は現在パンの直売専門で宮城県製パン協同組合の一員として、組合にその名をつらねているのである。

本表調査表には元禄時代創業の委細の顛末は残念ながら名記されておらず、記録としては蛸屋で販売した明治三十年時代のコッペ一個小売価格五厘、食パン一斤一錢から三錢、アンパン一個五厘から大正時代に一錢、昭和時代に移つて一錢となつた模様が記してあるのみで、その他一切不明、ともかくその蛸屋老舗は元禄時代からパンを始めたとは常識的に考えられず、これはおそらく、明治維新によつてかもざれた文明開化の影響を受け東北地方にもパン食勃興の波が滲透するにおよんで、商売に利用したものと推測されるのだが、いずれにしても、元禄十一年の創業歴をもつパン屋？これは本県業界はもちろん、全国的にもおそらくは他に類例をみない、誇りのひとつとなるものだろう。

創業歴ではその蛸屋老舗を筆頭格として、明治十九年創業の前記伊藤製菓、大正二年創業の大石パン店（古川市七日町）、大正五年創業の菅原製パン（登米郡石越町）、大正八年創業の寺沢製菓（仙台市原町）、大正九年創業の玉泉堂（玉造郡鳴子町）大正十年創業のさきもり製パン（伊具郡角田町）大正十一年創業のつたや（石巻市渡波町）、大正十二年創業の山清商店（本吉郡志津川町）、大正十二年創業の株式会社虎屋（仙台市北村木）大正十三年創業の田辺菓子店（登米郡登米町）、大正十四年創業の西浦菓子舗（登米郡東和町）、大正十三年創業の木村屋（遠田郡涌谷町）大正十五年創業の喜進堂本店（加美郡小野田町）等々の各社は、明治から大正時代を拠点に発足した先輩格、あとに三十四社にあまる大多数はいずれも、昭和時代へ移つてからの創業歴をもつグループで、やはりこのよう

業者構成分布図をみると、昭和時代にかもされた新しいパン食時代に対応して、新しく伸びる新銃業者の躍進の姿があきらかに俯瞰することができるのである。

つぎに調査対象四十九社の内、これを創業歴順に分類すると、その内訳は左のとおり。

元禄十一年創業 一社

明治十九年創業 一社

大正時代 二年創業一、五年創業一、八年創業一、九年創業一、十年創業一、十一年創業一、十二年創業一、十三年創業二、十四年創業一、十五年創業一 以上十二社

昭和時代 二年創業一、五年創業五、十年創業二、十五年創業二、二十年創業一、二十二年創業一、二十二年創業一、二十三年創業三、二十三年創業一、二十五年創業二、二十六年創業三、二十七年創業一、二十九年創業二、三十年創業一、三十二年創業一、三十五年創業一、三十六年創業一、三十七年創業一、三十九年創業一、四十二年創業一 以上三十四社

(iv) 技術系統

調査対象四十九社の内、技術系統的にそれとはつきり指摘しているのは計十社で、その内訳は銀座木村屋系二、新宿中村屋系一、福島村山パン系一、仙台屋系一、神田精養軒一、千秋堂系一、仙台日進堂系一、以上の十社で、やはり地元の仙台日進堂系が僅かながら木村屋系と並び、あとは銀座木村屋系の二社、その他各一社が技術系統の順となつてゐる。

この内木村屋系は仙北製菓（古川市稻葉）、木村屋（遠田郡涌谷町）の二社、仙台日進堂系は喜進堂本店（加美郡小野田町）、ささもり製パン（伊具郡角田町）の二社、他は仙台小新堂系高正菓子店（桃生郡桃生町）、千秋堂系寺沢製菓（仙台市原町）、神田精養軒系丸雄ベーカリー（牡鹿郡女川町）、仙台屋系昭栄堂（栗原郡鷲沢町）、福島村山パン系佐竹パン（白石市東小路）、新宿中村屋系西浦菓子舗（登米郡東和町）、各一社がその

内訳である。

残る三十九社は技術系統的にはほとんど無縁で、製パン業を志した動機は種々雑多、しかもその多くは戦後の食糧難に発奮、製パン業の将来性に期待して、菓子屋から転業したもの、菓子製造業一本槍では満足できないもの、時代の推移と一般顧客の要望で、菓子とパンと兼業形態で商売の範囲をひろげたもの、学校給食パンの委託加工を動機に製パン業の分野に進出したもの、多年パン類の請け売りを続けたが、日数の経つた製品では顧客が満足せず、その対策としてパン類の自家製造を始めたもの、離農後菓子製造職人となるもパンの現代性に着眼転職開業したもの、地方を渡り歩くパン職人に奨められて開店したものの、前経営者の不振を挽回するため、実権を引き継いだもの、食糧配給公団パン委託加工場指定が動機で製パンメーカーに転業したもの、等々がその内訳で、やはり土地柄菓子屋系統の業者がその大部分を占めているかのように見受けられるのである。

(二) 事業者の代目

宮城県製パン業協同組合を構成する組合員の実態が、大体以上のとおりであるから、事業者の経歴も初代独立創業組が圧倒的に多く、調査対象四十九社の内、初代創業に該当するもの二十八社、二代目に該当するもの十五社、三代目に該当するもの四社、四代目に該当するもの一社、十代目に該当するもの一社がその内訳で、やはり本県業界のばあいも、企業經營面の新旧交代現象は時の流れと環境の変化によつて、激しく移り變つていることが、この数字をみてもあきらかに推測される。

つぎにこれら事業者を年齢別に分類すると、最年長が七十年代の三名、六十代の十一名、五十代の十二名、四十代の十名と、四十代から六十年代の業者が圧倒的に多く、あとに続く三十代の二世三世組が七名、二十代の四名不明二名、計四十九名がその内訳となつてゐる。

四十代から六十年代の年齢層の業者が、数のうえでも圧倒的多数を占めるという現象は、豈に本県業界のみに見る異例的なものではなくて、他のいづれの地域にも共通する現象で、やはり業界運営の実権をにぎるものは、

これら年齢層に属する業者間の独壇場である実態を立証するものだが、しかし四十年代の十名、三十年代の七名、二十代の四名という数字は、本県業界を構成する人脈面でも、古きものが、やがて新しきものにかわる動きの様相をあきらかに示唆するものであつて、これは当然のことながらも、旧一套脱皮に躍進の道を求める希望の星として、今後の活躍がおおいに期待される所以でもあろう。

(3) パン製造技術面の推移

つぎに本県におけるパン製造技術面の推移だが、一応の順序として、明治十九年創業の伊藤製菓（刈田郡蔵王町、代表伊藤庄吉）の例をみると、現当主は二代目（六十七才）だが、もちろん創業当初から大正時代にかけては、食パン、菓子パン類の製法も、自家製酵母であるホップダネ、サカダネにすべてを依存した。そして石造窯による家内手工業的な製法から脱皮して、電熱窯、混合機等を導入したのが昭和三十四年、さらにデバイダー、モルダー等を使い始めたのが、同三十六年から三十八年、同四十二年には自動包装機その他を導入して、生産機構の近代化に成功、現在業態は卸専門だが、学校給食パンは小学校七校、中学校三校を担当している。

本県業界における明治時代の記録としてはこの程度のもので、しかも個人調査表には委細記入もれの点が多く、すべて明確を欠く嫌いもあるが、つぎに大正二年創業の大石パン店（古川市七日町）の例をみると、現当主高橋岩蔵（二代目五十五才）で、業態は直売が主、創業当初食パンは造らず（記載事項不明）、サカダネは昭和十二年まで踏襲、これをイーストダネに切替えたのが昭和二十四年で、石造窯から電熱窯、混合機に移行したのが同三十年、さらにデバイダー、モルダー等を使い始めたのが、昭和三十五年から同三十八年の時代、その間自動包装機なども導入している。なお昭和十年の時点では、食パン一斤当り十四銭、アンパン一個当り二銭で販売製品はアンパン類四種類、味付パン七種類、中生パン八種類、これが当時の状況だと記録されている。

さらに大正五年創業の合資会社菅原製パン（登米郡石越町）代表菅原重

男（四十八才二代目）の例をみると、自家製酵母による食パン、菓子パン類の製造方式を踏襲したのは、昭和二十五年頃の時代まで、創業当初の石造窯を電熱窯に切り替えたのが昭和二十五年、同三十五年には混合機、デバイダー、モルダー等を導入したが、業態は直売が主な関係で、学校給食パンは現在中学校一校だけを担当している。

つぎに大正十四年創業の西浦菓子舗（登米郡東和町）代表佐藤正一（初代六十四才）の例だが、現当主は本表調査によると、東京新宿中村屋で技術を修業したとあって、創業時代すでに石造式ドイツ窯を使用し、サカダネ式による菓子パン、ホップスダネ式による食パンの製造方式を踏襲するも、昭和十二年には遅く、イーストダネによる方式に切り替えている。そして同三十三年に電熱窯、同三十七年に混合機、モルダー等を導入、現在は直売が主で中学一校を担当している。

以上大正時代の創業経歴をもつ調査対象十二社の報告をみると、この時代にみる製パン技術面の推移はいずれもみな大同小異の状況にあり、強いて列挙する本県業界特有の事項は何も発見されない。それというのも、この個人業態調査表による記入事項が委細徹底を欠き、資料的価値が乏しくそのため本文にも徹底を欠く嫌いが多分にあつたからで、以下昭和時代に移り、本県の山間僻地にある製パン企業者としてのなやみを訴えた一例があるので、参考までにその要点を次に記すことにする。

それは昭和三十二年に創業した米川農業協同組合（登米郡東和町米川）

組合長平金三理事の報告によるものだが、その記載事項をみると、米川地区はそのほとんど（八二%）が山林地帯で、水田面積は僅かに一二〇アール程度、そのため終戦後極度の食糧難にみまわれ、学童の体位は低下の一途をたどるのみという悲惨な状況にあつた。

当時学校側の熱烈な要請により、昭和三十二年一、九一〇人の学童を対象に完全給食が実施され、当協同組合はその給食源を引き受けたが、しかしその後の推移をみると、残念ながら学童は減少の一途をたどるのみで、

昭和四十一年に二五〇名の一校を加えて、現在なお給食対象児童一、五六

二人、しかも今後四十六年までにはさらに減少を続ける状態にあり、その反面協組は技術と優秀の機械は絶対必要欠くべからざるものとなるにもかかわらず、残念ながら設備投資と企業面の収益の均衡がとれず、学童の体位、衛生上の問題点等を勘案するとき、今後の重大問題として大きく表面化する様相を呈していると、本表調査を通じ、学校給食パン行政面の苦悶を訴えている。

現在米川農業協同組合は小学四校を担当しているが、学童の減少に加えて、生産の合理化目的を達成するため、設備投資等の必要に迫られるも、問題は投下資本と営業収益のアンバランスという点に一大難点があるわけで、これは単に給食パンを担当する農協自体の問題だけに止らず、県下給食行政全般的な問題として、対策の急務を要請される事例のひとつである。

(4) 製パン機械

調査対象四十九社の内、機械生産システムをとるとみられる企業は僅かに五社、その内訳は千葉喜製パン（石巻市不動町、代表千葉太郎）、株式会社虎屋（仙台市北木材、代表原田コハル）、三共糧食株式会社（遠田郡小牛田町、代表佐々木浩）、株式会社加賀屋（名取市植松町、代表垣内久一）、仙台食粉株式会社氣仙沼製パン工場（氣仙沼市古町、代表似内敏雄）以上のとおりで、残る四十四社はいずれも電熱窯にモルダー式の中型企业形態の業者によつて、占められている。

試みに前記機械生産システムを採る該当五社の施設状況をみると、千葉喜製パン工場は創業は昭和二十六年だが、石造式ひら窯を使用したのは昭和二十六年から同四十年まで、昭和二十六年には別途電熱窯、混合機を導入、同三十年にモルダー、おなじく三十二年にデバイダー、さらに同三十年には自動包装機その他を導入、そして昭和四十年には運行窯を設置、製パンの流れ作業による近代化システムを採つていて。

つぎに株式会社虎屋のばあいだが、創業は大正十二年、現当主は一代目だが、創業時代の石造窯を電熱窯に切り替えたのが昭和二十五年、これに

ともなう混合機の導入が昭和二十三年、同二十五年にデバイダー、同三十四年に自動包装機、その間従来の電熱窯を運行窯に切り替えたのが昭和二十六年、さらに昭和三十七年にはオイル窯を入れて、製パンの機械化に成功している。

これに続く三共糧食株式会社のばあいだが、創業は昭和二十五年、現当主は初代だが、パン製造業の将来性に着眼、食生活改善に役立つことを目標に商売を始め、鉄道弘済会等にパンを納入した。当初は、この地域にパン屋らしいパンの店は一軒もなく、同社は町内でのパン屋の草分け的存在となつていている。

その三共糧食が創業当初の石造窯を電熱窯に切り替えたのが昭和三十一年、機を一つにして混合機、モルダーを導入、同三十三年にはデバイダーと共に運行窯を設置し、機械化製パンシステムを探り、同三十八年には自動包装機等を導入して、小学五校の学給パンを含めた卸売専門の分野で活躍している。

つぎに株式会社加賀屋のばあいだが、創業は昭和二十九年、現当主は初代で終戦後の困難をきわめた食糧事情を考慮し、粉食推進の必要性を痛感して、製パン業に手を染めた経歴のもち主とあって、企業的にも伝統の家内手工業的な形態では満足せず、設備の近代化に着目して生産面の合理化目的を達成し、現在小学二十校、中学五校、その他一校の学給パンを含めた卸売専門の分野で活躍している。

その加賀屋が創業時代の石造窯から、電熱窯に切り替えたのが昭和三十一年、さらに運行窯を導入したのが同三十四年、これに加えてオイル窯を導入したのが同四十二年で、それとともになう混合機が同三十一年、続く三十四年にはデバイダー、モルダーを使い始め、同四十年には自動包装機その他を導入して、機械化製パン工場にふさわしい諸施設の充実振りをしめしている。

これに続ぐ仙台食粉株式会社氣仙沼製パン工場のばあいだが、現当主似内敏雄氏は、前經營者の事業不振による倒産の危機を防ぐため、約二千万

円の投資を引き継ぎ、現在同社代表として運営の掌にあたり、小学九校の学給パンを含めた卸売専門の分野で活躍している。

昭和三十六年現在の時点では電熱窯、運行窯、混合機、デバイダー、モルダー、自動包装機等、諸施設完備の状況が記載してあるだけで、その間ににおける製パン機械の推移に関する事項は委細不明、したがつて具体的に言及することはできないが、しかし大体において昭和時代創業者の製パン機械導入面にみる動きは、本表調査表にみるどの業者のばあいをみても大同小異の状況にあり、発足当初の石造窯からやがて電熱窯に移り、同時に混合機、デバイダー、モルダー、自動包装機等を導入して、完全形態ではないが、漸次製パンの機械化をめざして歩一步と前進しているのが、本県業界における製パン機械推移の概況だといえるのである。

(b) パン配達方式の推移

明治大正時代はもちろん、昭和初頭時代へ移つてからも、パンの配達方式はその大部分が箱車に依存したしきたり、それは宮城県下における製パン業者のばあいもその例外ではなかつた。

大正二年創業の昭栄製パン株式会社を始め、大正時代の創業歴をもつ各社のパン配達方式の推移をみると次のとおり。

(1) 昭栄製パン株式会社（仙台市）

箱車式配達方式に依存したのは昭和五年まで。リヤカー式配達方法を踏襲したのは昭和二十二年まで。昭和二十七年から貨物自動車による配達方式を全面的に採用している。

(2) 大石パン店（古川市）

創業時代の箱車式配達方法をリヤカーに切り替えたのは昭和十二年、昭和三十五年からは貨物自動車による配達方式を全面的に採用している。

(3) 株式会社寺沢製菓工場（仙台市）

創業時代の箱車からリヤカーによる配達方式による配達方式に切り替えたのが昭和八年、昭和二十二年からは貨物自動車による配達方式を全面的に採用している。

(1) 堀江製菓舗（玉造郡鳴子町）

創業時代の箱車からバイク式配達方法に切り替えたのが昭和二十五年、同一十九年から全面的に貨物自動車を採用している。

(2) 伊藤製菓（刈田郡藤王町）

創業時代の箱車からリヤカーに切り替えたのが昭和三十年、機を一回して貨物自動車による配達方式を全面的に採用した。

(3) 木村屋（遠田郡浦谷町）

創業時代の箱車をリヤカーに切り替えたのは昭和一十七年、続く一八年からは貨物自動車による配達方式を全面的に採用している。

(4) 喜進堂本店（加美郡小野田町）

創業時代の箱車をリヤカーに切り替えたのは昭和一十七年、続く一八年からは貨物自動車による配達方式を全面的に採用している。

(5) わだみり製パン店（伊見郡角田町）

創業時代の箱車式配達方法を踏襲したのは昭和二十年まで。続いてリヤカ一式配達に移り、貨物自動車による配達方式を全面的に採用したのは昭和三十六年からであった。

—宮城県製パン協同組合個人調査表—

所 在 地	社 名	代 表 者	創業歴	技術系統	業 慶	施 設 状 況	備 考
桃生郡矢本町	大 勇 堂	大 村 幸 男	昭和10年	食、菓、学	直 売	電気窯、モルダー	二 代 目
石巻市不動町	千葉喜製パン	千葉 太 郎	昭和26年	食、菓、学	卸	機械生産	初代（独立創業）
山元町鷲足中筋	幸 梅 堂	及川 幸二	昭和21年	食、菓、学	卸	電気窯、モルダー	初代（独立創業）
玉造郡鳴子町	玉 泉 堂	佐々木 克 衛	大正 9年	食、菓、学	卸	電気窯、モルダー	三 代 目
古川市綾葉	仙 北 製 菓	高 橋 太 加 治	昭和20年	食、菓、学	卸	電気窯、モルダー	初代（木村屋系）
登米郡石越町	青 原 製 パ ン	青原 重 男	大正 5年	食、菓、学	直 売	電気窯、モルダー	二 代 目
本吉郡志津川町	山 崎 商 店	山 内 清 徳	大正12年	食、菓、学	直 売	電気窯、モルダー	初代（独立創業）

(ii) 田辺菓子店（登米郡登米町）

創業時代の箱車式配達方法、リヤカー式による配達方法という段階を経て、貨物自動車による配達方式を全面的に採用したのは、昭和三十八年か

いであった。

(3) 今賀会社山清商店（本吉郡志津川町）

創業時代の箱車をリヤカーに切り替えたのは昭和十五年、昭和三十五年からは貨物自動車による配達方式を全面的に採用した。

以上が明治、大正時代に創業した該当各社のパン配達方式の推移で、昭和初頭時代から中期の頃までに創業した業者も、パン配達方式の推移といふ点では、大体前者と大同小異の状態で進んでいることが、本表調査記録である。

なお、調査対象四十九社の内、現時点での貨物自動車による配達方式をとっているものが、計四十四社と圧倒的多数を占め、直売専門とみられる小規模形態の五社は、配達等をあまり必要としない関係で貨物自動車等を採用せず、自転車、リヤカーなどを利用しているのが、本県業界における配達方式推移の現状のようである。

古川市新堀旭町	風月菓子店	佐々木庄一	昭和32年	食、菓、学	直 売	電気窯、モルダー	初代（独立創業）
石巻市渡波町	つたや	津田義夫	大正11年	食、菓、学	直 売	電気窯、モルダー	初代（独立創業）
登米郡東和町	西浦菓子舗	佐藤正一	大正14年	食、菓、学	直 売	電気窯、モルダー	初代（新宿中村屋系）
仙台市原町	笛谷製菓	鈴木喜代治	昭和27年	食、菓、学	直 売	電気窯、モルダー	初代（独立創業）
志田郡三本木町	大正堂	佐々木茂次	昭和15年	食、菓、学	直 売	電気窯、モルダー	二 代 目
仙台市北六番町	原田家舗	原田仁一	昭和25年	食、菓、学	卸	電気窯、モルダー	二 代 目
白石市東小路	佐竹パン	佐竹貞雄	昭和26年	食、菓、学	卸40、小60	電気窯、モルダー	初代（福島村山パン系）
登米郡迫町	キゼン菓子店	木村匡	昭和37年	食、菓、学	直 売	電気窯、モルダー	初代（独立創業）
栗原郡鶴沢町	昭栄堂舗	山内菊治	昭和2年	食、菓、学	直 売	電気窯、モルダー	初代（仙台屋系）
牡鹿郡女川町	(雄)ベーカリー	阿部佳悦	昭和35年	食、菓、学	卸	電気窯、モルダー	初代（神田精養軒系）
古川市中里町	久盛堂	熊谷久雄	昭和5年	食、菓、学	卸	電気窯、モルダー	初代（独立創業）
仙台市長町	蛸屋老舗(合)	蛸忠治	元禄11年	食、菓	直 売	電気窯、モルダー	十 代 目
柴田郡大河原町	口下製パン	口下昌一	昭和30年	食、菓	直 売	電気窯、モルダー	初代（独立創業）
栗原郡築館町	(正)製菓	佐藤好乃		食、菓、学	直 売	電気窯、モルダー	初代（独立創業）
登米郡石越町	板倉菓子店	板倉関	昭和26年	食、菓、学	卸	電気窯、モルダー	初代（独立創業）
登米郡東和町	米川農協	平金三	昭和32年	食、菓、学	直 売	電気窯	2代（学給パン）
仙台市二十人町	昭栄製パン舗	伊藤勝郎	昭和5年	食、菓、学	卸	電気窯、モルダー	二 代 目
仙台市小田原北一番丁	丸正製菓舗	熱海静	昭和29年	食、菓、学	卸	電気窯、モルダー	初代（独立創業）
古川市七日町	大石パン店	高橋岩藏	大正2年	食、菓、学	直 売	電気窯、モルダー	二 代 目
仙台市原町	寺沢製菓舗	寺沢春吉	大正8年	食、菓、学	卸	電気窯、モルダー	初代（千秋堂系）
玉造郡鳴子町	堺江製菓舗	堺江通治	昭和5年	食、菓、学	卸	電気窯、モルダー	二 代 目
刈田郡蔵王町	佐藤製菓	伊藤庄吉	昭和19年	食、菓、学	卸	電気窯、モルダー	二 代 目
仙台市若林町	三丸食品工業舗	水戸こう	昭和23年	食、菓、学	卸	電気窯、モルダー	二 代 目

仙台市福住境町	開進堂	遺藤正俊	昭和42年	食、菓、学	卸	電気窯、モルダー	初代（独立創業）
栗原郡若柳町	久我製菓舗	久我東吉	昭和5年	食、菓	直売	電気窯、モルダー	初代（独立創業）
柴田郡川崎町	小山本店舗	小山長一	昭和5年	食、菓、学	卸	電気窯、モルダー	四代目
遠田郡涌谷町	木村屋	岩淵寿	大正13年	食、菓、学	卸50、小50	電気窯、モルダー	初代（木村屋系）
桃生郡桃生町	高正菓子店	高橋正美	昭和22年	食、菓、学	卸40、小60	電気窯、モルダー	初代（仙台山新堂系）
仙台市北材木	虎屋舗	原田コハル	大正12年	食、菓、学	卸	機械生産	二代目
遠田郡小牛田町	三共糧食舗	佐々木浩	昭和25年	食、菓、学	卸	機械生産	初代（独立創業）
石巻市大爪井内	相沢製菓店	相沢茂夫	昭和25年	食、菓、学	直売	電気窯、モルダー	三代目
塩釜市南町	村上商店(合)	村上和吉	昭和23年	食、菓、学	直売	電気窯、モルダー	二代目
塩釜市北浜町	円満堂舗	大槻富治	昭和10年	食、菓、学	卸	電気窯、モルダー	初代（独立創業）
加美郡小野田町	喜進堂本店	佐々木正喜	大正15年	食、菓、学	卸、直売	電気窯、モルダー	二代（日進堂系）
伊具郡角田町	ささもり製パン	笹森栄之助	大正10年	食、菓、学	直売	電気窯、モルダー	二代（日進堂系）
登米郡登米町	田辺菓子店	田辺富男	大正13年	食、菓、学	直売	電気窯、モルダー	二代目
名取市植松町	加賀屋舗	垣内久一	昭和29年	食、菓、学	卸	機械生産	初代（独立創業）
志田郡鹿島台町	諫訪家	諫訪桃雄	昭和23年	食、菓、学	直売	電気窯、モルダー	初代（独立創業）
黒川郡大御町	大御製菓	角田義造	昭和30年	食、菓、学	卸	電気窯、モルダー	三代目
柴田郡柴田町		村上喜一郎	昭和24年	食、菓、学	卸	電気窯	初代（独立創業）
気仙沼市古町	仙食気仙沼パン舗	似内敏雄	昭和36年	食、菓、学	卸	機械生産	初代（独立経営引継ぎ）
牡鹿郡牡鹿町	鮎川商工協組	鈴木光郎	昭和39年	食、菓、学	卸	電気窯、モルダー	初代（町内給食開始のため）

秋田県パン業界の歴譜

た。

一、秋田県のパンと人のあゆみ

秋田県のパンの歴史は相当古く、その淵源をただすと遠おく慶応年間にさかのぼる。すなわち秋田で小麦粉を発酵させ、食物に加工して食べ始めたのは、中野保治氏が酒母で発酵させた“酒饅頭”を売り出したのが始祖といわれ、現在の亀の丁中野屋は三代目にあたり、いまなお酒饅頭を看板に営業を継続している。

◎当県下における食パン製造の始まり

石井留吉氏が東京に出てパンの製造技術を修得したのは、明治十九年頃の時代であった。そして同二十三年秋田へ帰郷、布川信三郎、中野彦太郎高橋福蔵氏らと共同で共同製パン工場を当地に設立した。当時はもちろんパンを造るにも圧搾酵母などあるはずではなく、自家製のホップ種で食パンを造り、売り出したのがそもそも始まりであった。

続いて明治二十五年には秋田の開運堂（加賀谷家三郎氏）が、さらに同三十五年には横手の木村九助氏が、東京三田木村屋で製パン技術を修得し横手に帰郷して木村屋パン店を開業した。続く明治三十八年には開運堂が軍隊にパンを納入するため雇入れたパン職人で、北山勇吉と称する人が秋田で独立開業に踏み切った。その勇吉氏は明治三十年仙台の江差日進堂で製パン技術を修得した経歴の所有者で、現在駅前で営業を続ける北山パン店がその店。スマヤパンの鈴木重男氏はこの店でパンの製造技術を身につけた人である。

◎連隊の移駐でパンが売れ出す

明治三十一年、仙台から秋田市へ歩兵第十七連隊が移ってきた。秋田のパン屋にとってまさに好機到来、この軍隊移駐を契機にパンを軍に納入する機運が業者間のなかで急激にたかまつてきた。したがつてパン作りの技術もいきおい進歩し、パンの良質化に拍車をかける結果となつて発展した。

二代目小野千秋堂の主人が小野鉄之助（昭和十二年六十七才で死亡）で同店では明治三十三年、パンを大々的に宣伝し、市内至るところに大きな千秋堂のパンの宣伝隊が繰り出し、ここを先途と鳴物入りで、需要の喚起につとめたものであつた。

◎秋田のパンの移り変り

明治二十年頃の時代、秋田市の人口は大体二万五千人程度で、一般的には主として“堅パン”が多く販売されていた。食パンも砂糖入り（市民向け）と、砂糖なし（外人向け）の二種類に分けて製造され、これらの食パンはホップス種、南京種などを用いて造るのが、この時代の常套手段となっていた。

明治三十五年頃の時代になると、秋田市の人口も若干増大して二万六千人程度に達し、鉄道が開通してから米糀式による酒種製パン法が普及されるようになつてきた。ホップス種から糀種に移るという現象、この動きは他県と反対で、まことに当県特有の動向の一つであつたともいえる。

鉄道開通後は名物“駅売りパン”がはじめて登場する。珍らしく便利であるというので、このパンは非常によく売れた。形は丸型パンで砂糖だけ三割程度使つたのがその正体。大正五年には“玄米パン”が石井パン店から売り出されている。そして大正七年（人口四万人程度に増大）には土岐章田辺玄平両氏の指導で、製パン講習会が当地で開催された。その伝授を享けたのが吉田忠治郎、米沢幸一の両者でかれらは以来製パン技術面の指導者として県下業界で活躍した。

東京銀座木村屋總本店の創始者、木村安兵衛翁によつて創始されたアンパンは、当県下においても大正九年頃の時代から一般庶民に親しまれ、非常ないきおいで売れ始めた。また自家製のホップス種、南京種などにかわり、生イーストを使い始めたのは、昭和の初頭時代からであった。

◎戦前戦後時代と秋田のパン

大東亜戦争勃発直前、当原下で製パン用として消費された小麦粉数量は月平均概ね一、〇〇〇袋程度の数量であった。しかし昭和十六年食糧統制時代に突入すると、約三百袋増の一、三〇〇袋程度に増大している。さらに進んで昭和二十三年の計画配給時代に移ると、製パン高も一躍増大し月平均五、〇〇〇袋程度の数字を記録している。これはもちろん、米どころの秋田でも食糧事情は依然として悪るく、ためにパンの強制配給という非常措置のもたらした所産ともいえるものであった。

昭和二十七年麦類の統制が撤廃されると、全県下一ヵ月平均のパン生産量は概ね一二、〇〇〇袋とやや平常どおりの線に戻つた。そして昭和二十九年から三十年頃の時代を迎えると、秋田のパンも配給時代の食慣習で、一般県民の口に馴染んで来たものが、概ね二、〇〇〇袋増の一四、〇〇〇袋に達する大きな伸びを示した。大体以上が戦前から戦後に至る秋田のパンの歩みの概況である。

二、秋田県パン協同組合と業界の変遷状況

秋田県でパン業者間に主体をおく独自の組合機関が結成されたのは、昭和二十一年六月十九日のことで、当初の組合名を秋田県パン商工業協同組合と称し、理事長に山形屋堅吉、専務理事に加賀谷家三郎の両氏を選任、以下役員五名という陣容でスタートした。

それ以前、すなわち、明治、大正から昭和初頭時代までは、全国各地いずれの県下でもみなおなじであるように、当原下においてもパン屋は独立した一個の企業者として認められず、日暮工連の支配下に隸属する菓子部門の一部（パン部会）として、その傘下に拘束されていた。

当時の統轄団体は、秋田市のばあい秋田菓子商工業協同組合で、菓子業者もパン業者も全部が共同世帯で、おなじ屋根の下で生活していた。しからば秋田市を除く郡部市町村地域のばあいはどうであったか、というと、やはり秋田市のばあいと同様に、郡部枢要地域に菓子商工業協同組合支部なる組織が設けられ、一部特定個人関係を除く大部分の業者間は、前記菓子協の管轄下で、配給パンその他の業務を続けてきた。

以上管区別組合の分布状況を参考までに記すと次のとおり。

一、団体別

秋田菓子商工業協同組合（秋田市一帯を制轄）

能代菓子商工業協同組合（能代地域一帯を制轄）

平鹿菓子商工業協同組合（平鹿地域一帯を制轄）

大曲菓子商工業協同組合（大曲地域一帯を制轄）

雄勝菓子商工業協同組合（雄勝地域一帯を制轄）

大館菓子商工業協同組合（大館地域一帯を制轄）

由利菓子商工業協同組合（由利地域一帯を制轄）

船川菓子商工業協同組合（船川地域一帯を制轄）

鷹の巣菓子商工業協同組合（鷹の巣地域一帯を制轄）

二ツ井菓子商工業協同組合（二ツ井地域一帯を制轄）

米内沢菓子商工業協同組合（米内沢地域一帯を制轄）

五城目菓子商工業協同組合（五城目地域一帯を制轄）

六郷菓子商工業協同組合（六郷地域一帯を制轄）

鹿角菓子商工業協同組合（鹿角地域一帯を制轄）

角館菓子商工業協同組合（角館地域一帯を制轄）

二、個人別

秋田市平沢義明（食品関係別会社の関係で残存）

秋田市木内英作（

秋田市柴田吉平（

鹿角郡花輪町小田島治左衛門（

大館市田中磯松（

鷹の巣小野吉平（

河辺郡和田町沢村銀右衛門（

由利郡平沢町佐々木謙一郎（

雄勝郡横堀町小山田兵太郎（

仙北郡角館町八田五郎（

大体以上が秋田県パン商工業協同組合が結成される以前の県下業者間の実態で、このような統轄体制のもとで昭和二十年終戦を迎えるまでおしこしてきた。

やがて終戦後秋田県粉食協会が結成された。この協会は県下で生産される麺製品とパン製品を重点的に統轄管理する機関で、県下パン業者間にとつて時期的に手おくれの形となつた観もあるが、ともかく多年の念願であつたパン屋が菓子屋との共同世帯から脱皮し、一個の独立した企業として主体性をとり戻すのに、粉食協会の結成は絶好のよりどころとなるものであつた。

そして、昭和二十一年六月には懸案の秋田県パン商工業協同組合が結成される。さらに同一十五年一月二十七日には、中小企業等協同組合法施行令第四条の規定にもとづき、従来の組合を組織変更し、あらためて秋田県パン協同組合と看板を塗り替え、理事長に有明市郎、専務理事に浅利金十郎の両氏を選任し、以下役員五名という陣容で戦後の新しいパン食時代に

三、秋田県パン業界の現状

秋田県下におけるパン業者は他県のそれに比較して、業者間の数が非常によく少ないのが特長で、現在すなわち昭和四十三年十一月現在の時点で県パン協に参加する業者間の内訳、組合員の出資口数等の委細を参考までに記すと次のとおり。

秋田県パン協同組合の現況

工場名	出資口数	工場名	出資口数
秋田パン工場	三八六	三松堂パン工場	六三
浅利パン工場	二四〇	光月堂パン工場	三七
吾妻パン工場	二二一	高島パン工場	二三
スズヤパン工場	五六八	長門パン工場	八四

概ね以上が秋田県パン協同組合を構成する組合員製パン工場の現況であるが、さてしかばん下業者間のおかれる現状はどうであろうか。卒直にいつて県内業者だけであれば、統制のとれた工場配置の関係でいま問題とされる企業競争もそれほど激しくはなく、いわゆる共存共榮主義でどうにか安定を保てる現状にあるとのこと。

しかるに大企業を代表するトツペマークー、東京のヤマザキパンが仙台市に進出し、日下量産システムの新工場を建設中で、昭和四十三年十二月中に完成創業開始の運びになるという情報。さらに地元秋田市第一パンとヤマザキパンの関係は全然ないが、一方タケヤパンがヤマザキパンのパン類を除く菓子製品の全部を販売するという条件で、ヤマザキから相当額の資本を導入し、同社の資本を一、六〇〇万円に増資して再発足するという情報、これが県下パン業者間の経営面にどう響くか?現状では嵐の前の静けさとでもいうか、不気味な空氣のなかでその成行きが頗る注目されてい

平沢パン工場	二八	小田島パン工場	二六
油川パン工場	二九	村尾パン工場	二九
会津パン工場	五三	大館農産加工場	五四
能代パン工場	一九九	大館パン工場	八四
山田パン工場	一三四	桂月堂パン工場	三三
鳥井パン工場	三〇	岩沢パン工場	三六
伊藤パン工場	九四	小池パン工場	二七
工藤パン工場	九五	岩谷パン工場	四四
伊藤パン工場	三七	柴田パン工場	四五
高田パン工場	五三	湯沢パン工場	一七八
湊屋パン工場	四七	八田パン工場	五三
丸清パン工場	三一	三十二工場	一〇五八口

現にタケヤパンがヤマザキパンと業務提携する以前の状態は日産六十袋程度で、経営的にも不振を極めていたそうだが、それがこんどヤマザキパンと提携することになつて、一挙に生産量は増大し、現在は日産六十袋程度に達するまで業績が伸長したという話、この事実に照應するも、大企業攻勢の恐るべき影響力に対してはけつして無関心ではいられない。なんらかの方法で県下パン業界の防衛体制を能うかぎり、すみやかに確立する必要に迫られているのが現状のようであつた。

概ね以上が秋田県パン業界歴譜の概況である。

山形県パン業界の歴譜

一、山形のパンと人のあゆみ

山形のパンを語るに正確な記録はあまり多く残されていない。いや、これは山形県下パン業界ばかりでなく、他の諸県においても、明治以来の歴史と伝統に培かれた移り變るパンのあゆみ、それを組合小史の形で記録的にまとめた文献というものは、一部特定の都府県を除きほとんど残されていないのが現状で、いま明治百年を記念し、"パンの明治百年史"といふ業界懸案の編纂事業が進められていて、"歴史があつて歴史としての記録不在"の現状に接するとき、編纂委員側自体の苦労もさることながら、唯だもつて遺憾の念を深くする以外のなものもなかつた。

とはいゝ、山形県下パン業界には米沢木村屋を代表する森慶司、山形市のパン協理事長である三浦孫助、企業合同時代の新庄製パン有限会社代表鈴木八右衛門、酒田製パン有限会社代表大滝鯉吉、鶴岡製パン有限会社代表吉野英三郎、古く立派な創業歴をもつ錚々たる業者間の名も発見することができるのである。

ことに森慶司氏のばあいは、米沢木村屋としての創業歴が古く、企業合同比米沢製パン有限会社代表として活躍、県下パン業界をリードする重鎮として有名な存在であつたばかりでなく、現在の全日本パン協同組合連会

の前身、全国製パン業組合連合会結成当初から同団体の監事として東北六県を代表、中央業界で活躍した赫々たる前歴の所有者であつた点が深かい印象となつて甦つて来る。

この全パンと称する全国団体の結成にあたり、大阪の浅香忠雄氏、奈良の松村実之助氏、岡山の梶谷忠二氏、東京の采山久喜氏等業界一連の有志が発起人となり、昭和十六年十一月八日、東京日暮雅叙園で発会式を挙げ理事長に丸本彰造（陸軍主計少将）副理事長に相馬安雄（東京）、浅香忠

雄（大阪）、専務理事に柴山久喜（東京）、常務理事に白鳥三朝（東京）金森四郎（東京）、田中元蔵（愛知）、島倉孝太郎（富山）、松村実之助（奈良）、理事に打木吉則（神奈川）、梶谷忠二（岡山）、佐藤岸太郎（大分）、中井金寿郎（京都）、吉武正右衛門（北海道）、滝本登一（兵庫）、監事に森慶司（山形）、高世政吉（新潟）、相談役に木村栄三郎（東京）、森利藏（大阪）といった、全国業界を代表する精銳を選びすぐつて発足した顛末は一般周知のとおりだが、当時森氏は山形県製パン工業組合の代表であり、山形市には山形パン工業組合（昭和十六年十月結成）が別個に存在し、これは山形市内だけの業者間が結集してつくつた同業組合であるが、代表は梅月堂の佐久間秀司氏で、参加組合員はわずか二五六名程度のものであつた。

しかしこの時代、山形県ではすでに県一本化の製パン工業組合が組織され、山形市内には前記のとおり市一本化の工業組合が存在し、たとえパンは菓子の傘下に拘束されていたとするも、やがてパン屋はパン屋としての主体性を確立する地歩を着々としてかためて行つたという事実、これはたしかに秋田県パン業界のなんであつたかを知るにふさわしい、進歩的な動きのひとこまであつたといえよう。

二、県下パン業界の変遷状況

山形県はお隣りの秋田県と同様東北六県での有名な穀倉地帯、全国でも屈指の米産地という関係で、その昔の時代から米穀業者が製造業や商業関係を問わず、すべての面で実権を握つていた。ご他聞にもれず、パン屋の

ばあいも生れながらの純粹な業者は数少なく、パン屋といふもその大部分は米屋系統の業者が大部分で、現在に至るもマルヨネパン、置賜食糧、宮内食糧、山形糧穀、天童糧食、酒田製パンなど、県下での大手筋は全部が米屋系の製パン工場で、見様によつては山形のパンは米屋が主人、ほんとうのパン屋は下働き、これが県下パン業界の実態を分析した眞の俯瞰図でもあつた。

とはいえ、山形県下では明治時代の創業歴をもつ純粹のパン屋で、山口留吉と種する人がいた。山形市に店をもち、ひと頃の時代は相当売り出したパン屋だが、現在は廢業跡方もみられず、本人もすでに故人とはなつたが、ともかく歴史的には県下でいちばん始めにパンの製造販売業に手を染めたのはこの人であり、もともと製パン技術面でも経験十分の技術者であつた関係から、あらゆる機会を利して県下を行脚、製パン技術の指導とパン食の普及に努めた県下業者の功績者の一人であつたと伝えられている。

さてところで、当県下で同業者間の任意団体として山形パン工業組合が始めて結成されたのは、前記のとおり、昭和十六年十月、県一本化の山形県製パン工業組合もこの時代に生れた団体だが、そもそもパンを名乗る組合らしい組合が発足する以前は他県と同様に、当県下においてもパンは菓子の支配下にあつた。そらした現状から脱皮する目的で県内業者間を歴訪

パン業者独自の組合結成に起ちあがつたのが、佐久間秀司、安藤孝一、森慶司等の諸氏で、当時佐久間氏は日菓工連山形支部で、菓子部門とパン部門の双方を代表するリーダーでもあつた関係で、この三者コンビによる菓子部門からの脱退独立運動は見事に成功した。

もちろんそれ自体は任意組合で、法的にはなんらの権限ももたなかつたが、ともかく、このようにして結成された前記両組合は、昭和十八年五月組織変更し、こんどは完全に県一本化組織の山形県パン工業会に看板を塗り替えた。そして工業会の代表には梅月堂の佐久間秀治氏が引き続き就任し、会員として参加した業者総数は大体四十五名程度のものであつた。

やがて満州事変から支那事変、そして大東亜戦争へと戦局は拡大するに

および、時代は準戦時経済統制から本格的な戦時統制経済体制に移行する。当県パン業界もこの動きに即応し、統制組合組織に編成替えを強いる。そして山形県パン統制組合が発足、このとき佐久間前理事長が退任し、かわってパン統理事長に安藤孝一（ネオンパン）、専務理事に三浦孫助（山形糧穀）の両氏が選任され、この非常事態に対処して県下パン業界の運営に万全を期する体制を整えた。

◎県下業者間の企業整備概況

さて政府が戦争目的遂行のため、不急産業の整備淘汰と軍需生産の増強をめざす「戦力増強企業整備要項」なるものを公布したのは、昭和十八年六月一日のことであつたが、全国パン業界の企業整備が具体的に日程にのぼつたのは、昭和十六年八月三十日以後の時代からであつた。

当時調査した全パン連の記録によると、山形県パン業界のばあいは、企業整備前の工場数六〇、工場整備後の工場数五六工場、月間平均製パン実績二、〇〇〇袋となつてゐるが、これはもちろん第一次企業整備終了直後の概況で、その後大体四〇工場程度に整備統合されたものを、第二次企業整備によつてさらに統合縮少し、その結果県下主要地域の業者間は全部企業合同した。

◎企業合同体の分布状況

山形市	山形製パン有限会社	代表	三浦 孫助
新庄市	新庄製パン有限会社	代表	鈴木八右衛門
酒田市	酒田製パン有限会社	代表	大滝 鯉吉
鶴岡市	鶴岡製パン有限会社	代表	吉野 英三郎
米沢市	米沢製パン有限会社	代表	森慶 司

かくして配給パンは以上五地域に配置分散された企業体により、県下配給パンの全生産を担当することになるのだが、昭和十八年安藤理事長出張不在のため、これにかわつて米沢製パン有限会社代表の森慶司氏が代表に就任、パン統行政の采配を振うことになつた。

◎当県下パン業界の戦後における再建工作の概況

このように徹底した整備体制で戦争末期の非常事態に対処するも、戦い

我れに利あらず、皇軍の無条件降伏と同時に終戦を迎える。そして戦後の民主化政策進行による旧套脱皮で、県パン統も山形県パン協同組合に組織変更し、理事長に森慶司氏が就任、戦後のパン業界再建工作に第一歩を踏みだした。やがて食糧事情の好転も手伝つてパン業界は活気を盛り返し、発展の一途をたどるのだが、参考までに昭和二十五年一月現在における県下製パン工場の復興状況（全国製パン協議会調査）を記すと次のとおり。

◎総合の部

山形糧穀加工株式会社（山形市）	代表 阿部 一郎
米沢製パン有限会社（米沢市）	代表 森 廉 司
新庄製パン有限会社（新庄市）	代表 鈴木八右衛門
酒田製パン有限会社（酒田市）	代表 大滝三蔵
鶴岡製パン有限会社（鶴岡市）	代表 吉野英三郎
三光舎支店（余目町）	代表 鈴木清
長井製パン工場（長井町）	代表 深沢清七
木村屋製パン工場（張村）	代表 栗野健吉
宮内食糧工業有限会社（宮内町）	代表 山口勘七
米沢糧穀加工株式会社（米沢市）	代表 藤倉忠右衛門
置賜糧穀加工株式会社（高畠町）	代表 木村権六

◎委託の部

清水製パン工場（上山町）、天童製パン工場（天童町）
日ノ出製パン工場（寒河江町）、森谷製パン工場（谷地町）
西村製パン工場（桜岡町）、桜岡農村工業協同組合（桜岡町）
藤島食品会社（藤島町）、鈴木製パン所（余目町）
このような体制を整え、戦後再発足した森行政は昭和三十一年まで統き代つて三浦孫助氏が県パン協二代目理事長に就任し、現在に至つている。

◎戦前派業者間の分布状況

山形県下でいわゆる戦前派としての創業歴をもつ業者間の分布状況を参

考までに記すと次のとおり。

森慶司（米沢木村屋）、深沢清七（長井市木村屋）、栗野英助（南洋市木村屋）、佐藤勇（山形市サトウパン）、長岡勇吉（山形市栄進堂）、佐野晴重（山形市佐野屋パン）、佐久間秀司（山形市梅月堂）、三浦孫助（山形市三浦パン）、森谷栄太郎（河北町木村谷パン）、菅野一郎（天童市栄泉堂）、阿部喬（神町木村屋）、早坂善之助（大石田町早坂パン）、鈴木八右衛門（新庄市鈴木パン）、大滝三蔵（酒田市木村屋）、吉野英三郎（鶴岡市木村屋）、佐藤平治（坂田市藤屋）、鈴木清（余目町鈴木パン）以上

◎県下大手製パン工場の現況

所在地	社名	代表者名	設備状況と従業員数
米沢市	マルヨネ食品加工舗	西村茂樹	運行窯二〇〇kw 固定窯三〇kw 従業員一〇〇名
高畠町	置賜糧食加工舗	新野孝一	運行窯二〇〇kw 固定窯三〇kw 従業員七〇名
上之山市	日清食品加工舗	村越高明	運行窯六〇kw 固定窯一〇kw 従業員六〇名
山形市	山形糧穀加工舗	金山国次郎	運行窯二〇〇kw 固定窯三〇kw 従業員一〇〇名
新庄市	荒川製パン工場	荒川寛	運行窯八〇kw 固定窯一〇kw 従業員五〇名
余目町	余目製パン林式会社	鈴木清	運行窯九〇kw 固定窯一〇kw 従業員四〇名
酒田市	酒田製パン林式会社	菅原泰治	重油リール窯九〇kw 固定窯一〇kw 従業員八〇名
酒田市	林式会社第一製パン	吳金概	運行窯一〇〇kw 従業員七〇名

なお、山形県パン協同組合は現在左記メンバーで陣容を整え、運営されている。

大体以上が山形県パン業界歴譜の概況である。

福島県パン業界の歴譜

一、沿革

明治時代

福島県下で始めてパンが製造販売されたのは、正確な記録が残されていないので委細は判然としないが、一方手代木保氏（県パン協事務局長）が理事長命により、県パン史を編纂する目的で、過去の模様を調べた結果によると、当県での草分けは「福島市か平市」とも思われるし、あるいは又「郡山市」ではないかとも考えられる、ということであった。

そこでまず福島市のばあいだが、この地域では現在福島駅前で盛業中の「木村屋總本店」の名で有名な「木村屋製パン有限会社」が最古の創業歴を誇る筆頭格。この店舗の前身は木村屋パン店と称し、先々代金子松五郎氏の創業によるものであつた。

松五郎氏は千葉県の産といわれ、安政四年生れで明治六年十五才のとき東京銀座の木村屋に入店、店主木村安兵衛翁の薰陶を受け、米粃種式による日本独自の製パン技術を習得した。後年二代目金木義雄氏の話によると「父松五郎は東京で、フランス人ライト、築地精養軒勤務のチャリースにも、製パン技術を学んだ」

と語つていた。だとすると、初代松五郎はアンパンで代表される菓子パン類の製造技術は、銀座木村屋で学び、食パンやフランスパンの製造技術は前記外人に私淑し、双方の技を修めて当代一流のパン職人に成長したのがその前歴であつたともいえる。

やがて松五郎は銀座木村屋を辞し、パンの技術指導を兼ねて地方巡廻の旅に出る。そして仙台で有名な名門、日進堂パン店に招聘されたのが明治二十八年、すなわち、日清戦争が終戻した直後の時代であつた。

当時仙台第二師団でも他の前例に倣い、兵食用にパンを導入してこれを

奨励し、脚氣病の被害防止にもつばらこれ努めた。そんな関係で日進堂も軍需向けパンで商売繁昌の好機会にめぐまれ、同時に又、顧客にも軍人の家庭が非常に多かつた。その頃師団司令部付将校の馬丁で金島寅吉という男がいた。

寅吉は主人の命令で日進堂パンに常時食パンを購入するために日参した。そしてときにはパンの焼き上るのを待たされることも再々あつた。そこで自然パン焼きの松五郎とも親しい仲となり、寅吉も門前の小僧習わぬ経読むのたとえにもれず、パン作りの仕事に自然に興味をもち、松五郎も又問わず語らずの式で、パン作りの仕事の秘訣を、かれ寅吉に語り聞かせるようになつた。

やがて数年後、松五郎は福島にパン職人として迎えられることになつたが、このとき、妻のカネ子は訴えていわく、「不惑の齢を迎えていつまでも名人気質の渡り職人で終るのは不賛成だ。この辺で独立開店し、身をかためてはどうか」と奨められ、この妻子の忠言に翻意したかれは心機一転決意をかため、当時の福島町、俗称馬喰町といわれた豊田町に、資本金五円也で木村屋パンを開業、菓子パン類の卸売製造を主にスタートの第一歩を切つた。

技術的に絶対の自信をもつた木村屋のパンは頗る好評、その味の良さを買われて商売は順風満帆のいきおい伸びて行つた。とくに同店の「アンパンと味噌パン」は頗る評判がよく、食パンは酒種パンの丸型で一個一錢が当時の相場、その甘酸い香りはおのずから食欲をそそり、今日の食パン類に比較するとまったく異質のもので、むしろ実態は菓子パン類に近かいものであつたが、さるにしてもそれが受けた。

その後やがて間もなく、仙台から馬丁稼業をやめた寅吉が松五郎の跡を慕い、福島へ訪つて来た。話を聞くとかれば福島で独立開業の希望をもちそのための指導協力方を懇請するのが目的。松五郎も寅吉の熱意にほだされ快く願いを容れた。そして福島の芸妓屋と待ちで賑わう、通称北裡通りに金島パン店を開業させた。この店は菓子パンの製造卸売りを看板にス

タートしたのだが、これまた結果的にはあたりにあたりにあたり、松五郎の経営する木村屋パン店とならんで大いに繁昌し、一代の産をなすことになった。

それはそれとして、木村屋パン店初代松五郎の跡を継いだのは金木義雄

氏で、この人はもともと事業家肌の男、工場内でパン造りの仕事だけに終始する生活には、到底満足することができなかつた。そこで東京に出て精養軒に入り、あらためて進歩的な製パン技術を学んだ。

当時の精養軒には、現在パン洋菓子関係の指導者有名な高須八蔵氏（大門精養軒ベーカリー）大谷長吉氏などの鉢々たる技術者が勤務し、同社の製品は宮内省御用達であつた関係から、義雄氏は食べパン納入の使い役として、人力車に乗り、宮内省に出入りしたそつであつた。

このようにして木村屋パン二代目を繼承した義雄氏ではあつたが、しかしその間の足跡はけつして平地を走るような坦々たるものではなかつた。

ことにかれはもちまえの事業家肌で機械道楽といわれたほどの人、新しい

事業と機械の導入にはすこしも躊躇逡巡するところはなかつた。

そのためときには思わぬ失敗を招く事例も再々あつた。その顕著な一例として、第一次大戦後の反動景気に、無理なドロップや甘納豆の製造販売に手を出し、結果は売れ行き不振と無理な販路の拡張政策がたたり、貸倒れなどの累積で一時は無一文同様の姿になり、加えて辛酸を共にする愛妻は病氣で倒れるなど、重ね重ねの悲運にみまわれた。

やがて昭和七年五月、後妻として金木家に迎えられたクニ夫人は、当国民服一着という義雄氏を扶け、木村屋パン再興を計ることになつた。男三人、娘一人の俄か子持ちとなつた夫婦の苦労は、並み大抵のものではなかつた。しかし義雄氏はともかく小資本で開業しやすい麦煎餅の製造に着眼し、事業意欲に燃える持ち前のアイデアを活かし、その宣伝文句に当流行のカルピスの「初恋の味」にヒントを得、「初恋の味カルピス入り麦煎餅」と銘打つたチラシを作成して、市内全域に配布した。

当時麦煎餅の上得意であった女子師範の生徒から、「初恋の味」で顔を赫らめる者もあるというので、初恋の味なる歌い文句はやめてほしいと、

注文ができるほどの人気。ことに店舗は駅前という立地条件にめぐまれ、この麦煎餅商策は大成功、それが延て同店今日の大いに発展するキイボイントになつた。

とはいゝ、その木村屋パンも戦時下政府の至上命令による、企業整備は免れることができず、遂に企業合同を余儀なくされた。福島県製パン工業組合が設立されたのは、昭和十七年であつたが、同二十八年七月、福島県食パン普及協同組合に改組されると同時に、義雄氏は同組合専務理事に選任された。

その間義雄氏は、日本洋菓子協会の福島支部長として、石黒会長を始め高須八蔵、細内善次郎、大谷長吉氏など、中央要路の諸権威と交友を深め県下洋菓子の普及推進につとめた功績も、これ又特筆に価するものがあつた。

現在店内に掲げられる総理大臣賞を始め、数々の賞状や感謝状はパンの分野で、洋菓子の分野で、その振興発展につくした同氏の偉大な功績を雄弁に立証するものだが、その義雄氏も病には勝てず、昭和三十六年七月二日急逝した。巨星地に墮ち、秋風落葉たる観なきにしもあらずといふところだが、しかし同店は未亡人が社長に就任、三男哲夫氏が専務理事として采配を振り、この名門老舗の看板を繼承し、現在盛業中である。

— 大正時代 —

柳屋總本店（福島市万世町一、半沢和夫）は、前記木村屋總本店に統く福島市での名門、先代半沢満五郎氏は県下信夫郡島川村の菊地家に生れ、長じて半沢柳之助氏の養子となつた人。

満五郎氏は県立農業学校に学び、卒業後海兵団に入り、やがて海兵団の行事であつた遠洋航海に出発する。そして諸外国で知つたパン食の簡易さ日本人の粗食生活に比べ、如何にすぐれているか、かれの関心事はこの点にあつた。日本人の衣服が漸次活動的で便利な洋服に代り、それにもともなう生活の洋風化、そうした時代の流れを洞察したとき、日本人の間にも米食に代るパン食時代が、近かき将来必らずや到達するであろうと信じ、心ひ

そかに製パン業者としての姿を夢見るようになった。

しかるにその後幸か不幸か、かれは砲術手として勤務中負傷し、除隊帰郷の身になつた。そこでかれは知人の紹介で横浜市中区の日本堂に入り、この店で念願の製パン技術を修得した。やがてかれは半沢家に迎えられ、シナ子夫人と共に福島駅前通りに柳屋パン店を開業する。大正十一年のことであつた。

この時代はまだ自家製酵母の全盛時で、一般のパン職人はこれを秘法として珍重し、経験者は破額の高給をもつて迎えられた関係から、その技術は絶対に公開しようとはしなかつた。かかるに満五郎氏は中央で技術を学んだ。それ故地方的にはまだ未知数の段階にあつたイーストによるイーストパンの知識を身につけていた。同時に又かれは万事が秘密主義の狹量的な男ではなく、何人からも希望があれば身につけた進歩的な技術を惜しみなく公開し、県下のパン食普及推進に努めることを忘れなかつた。

それは業者間のばあいにしてしかり、町内の婦人会にしてしかり、希望があれば何處にでも出張してみずから技術指導にあたつた。そうした行動や業界をおもい、パンを愛する熱情が世間一般から高く評価され、結果的には柳屋パンの広告宣伝面でも大きく役立つた。そういう性格の満五郎氏であるから、中央パン業界での権威者で有名な柴田米作、和氣仲一、尾池竜明氏など、鍛々たる面々とも肝胆相照らす親交を結び、かれはこれら諸氏を福島県下に招聘し、技術講習会や研究会等を開催して県内諸製品の改善改良に努めるなど、数多くの業績を残し、県トパン業界の発展に大きく貢献した。

またその間、満五郎氏の一面を知る思い出話として、いまだに語り伝えられる挿話の一節に、こんな例があつた。かれは中央業界の進歩的な現状を調査する目的で上京、銀座街に足を運んだ。すると銀座木村屋総本店の筋向いで黒山の人ばかりがする風景が眼に映つた。何事ならんと覗いてみると、それはかの有名な銀座宝来パン開店当初の千客万来で賑うあの堂々たる姿であつた。

満五郎氏は近代的感覚にあふれた進歩的なその店頭風景をみて、求めるのはこれだと直感した。宝来パン独自の近代化された経営方式、それは確かにかれにとつて魅力の中心であつた。東京に学ぶ帰郷土産はこれだと、かたく信じたかれは、おりから地方出張中の親友尾池氏の帰京を待ち、宝来パン式諸製品の技術指導方を懇請した。もともと両者は肝胆相照らす仲よろしい、行きましよの話合いは直ちにまとまり、尾池氏は福島の柳屋パンに行って、半生パン類を代表する珍品の一種「ラ時雨」(宝来パンでは「ハテナ」の珍名で売出した)の秘法を伝授した。

柳屋パン店はこの珍集「ラ時雨」によつて一躍界限の大評判となり、店の繁榮に大きく役立つ成果を収めた。つまりこんな一例からするもかれのパン食普及に傾ける情熱、それが如何に強く旺盛なものであつたか、その辺の事情をあきらかによく理解することができる。またそのこと自体、柳屋パン店をして現在の大いに発展せしめる直接のキイボイントになつたのはもちろん、同時に又、県下パン業界にこの人ありと認められたのもそのためで、かれはために政界へ出馬する機会にも恵まれた。すなわち、第一回の普選で福島市市会議員選に立候補し、市民の圧倒的支持を得てみごとに当選。ときに満五郎氏まだ若冠二十九才の青年時代のときであつた。

やがてかれはその卓抜した政治的識見と公平无私、円満な人柄を買われ三十六団体あまりに關係、理事又は会長として手腕を振うことになるのだが、昭和十三年満州事変から日支事変へと戦局が拡大するにおよび、かれは感ずるところがあつて渡支、皇軍の作戦に協力して、土木建築人夫供給業に転じ、中支の戰野を縦横にかけまわつた。とはいゝ、不幸にして日支事変は太平洋戦争に発展、善戦空しく祖国の敗戦、日本軍の無条件降伏という事態に直面し、かれは皇軍將兵と共に俘虜となり、以来転々として収容所生活を続け、昭和二十一年十月無事帰郷した。

さすがの満五郎氏も引揚げ者ともなれば裸一貫の無一物、もとの製パン業者に返り咲くには資本的にも容易なことではなかつた。しかるに遠方より友來たるで、かれの再起に温かい援助の手をさしのべたのが、前記木村

屋パンの金木義雄氏で、友人にこの人を得たかれは、これによつてパン業界復帰の悲願を達成、再び県下業界で活躍する機会を迎えた。

そして昭和二十四年六月には、高倉理事長の跡を継承、福島県パン商工業協同組合理事長に選任される。同二十六年には麦類の統制が撤廃され、組合運営面で問題続出、この対策に必死で頑張るも事態は悪化するのみ。そして同二十八年には万策つき、進に組合解散を余儀なくされる状態に立ち至つた。

このような悲劇的事例は福島県パン協ばかりでなく、他の諸県でも類似の例を多くみる一種の共通的現象でもあつたとはいゝ、組合の悲劇がパンの悲劇を意味するものではけつしてなかつた。暗い夜が明けるとそこには再び陽の照るあかるい世界が訪つてゐる。

ご他聞にもれず、当県下でも直ちに福島県パン食普及協同組合が結成され、同時に満五郎氏は理事長に選任された。そしてかれは金木専務のよき相談相手となつて、自由経済時代に対処するパン業界としての新路線確立に精魂を打ち込み、県下業者間の附託にこたえる名理事長としての手腕を遺憾なく發揮した。しかるに満五郎氏は昭和三十六年胃癌を手術、小康を得て退院するや、たちまち周囲の団体から依頼事項の続出で、静養どころのさわぎではなかつた。その無理がたり、翌年九月二日再度入院、金木義雄氏の死去におくれること満一カ年目で、かれも又不帰の客となつた。

斗酒なお辞せず、一代の酒豪で鳴らした熱血漢、半沢満五郎かくてこの世から去るも、かれの門弟でその遺髪を繼ぐ者に、渡辺森雄、三浦善三両氏の名を発見することができる。渡辺氏は現在福島パン工業協同組合の理事長、三浦氏は福島県パン協同組合の専務理事として、岸理事長を扶け、血でつながる満五郎氏の精神を組合行政面に反映、その名を恥じめない活躍振りをしめしている。

— 昭和時代 —

カネマンベーカリー経営者岸久蔵氏は、会津若松市で綜合食品卸問屋を営むカネマン商店、岸久治氏の次男に生れ、会津中学卒業後父兄を援け、

卸問屋の家業に従事したが、カネマン一族は食料品、醸造、医薬品等各種の営業を多角的に經營、分家するばあい、一族との商競争を誘発するような事態を避けるため、おなじ商売はしないこと、これがカネマン一家の不文律のおきてとなつてゐた。

以上のようないくつかの関係で岸氏も独立開業するに、父兄が經營する小麦粉、砂糖等原料関係の商売を避け、その二次加工品であるパン類の製造販売業に着眼し、当時横浜にあつた東京銀座木村屋總本店の別会社、日本製菓株式会社常務、木村栄三郎氏の紹介で銀座木村屋に入り、この店で製パン技術を修得したのが、業界人として活躍するそもそもの第一歩となつた。

当時銀座木村屋は栄三郎氏が社長で、家伝のアンパン、菓子パンを主体に食パン、洋菓子など、新時代を代表する進歩的諸製品が数多く生産されていた。しかしながら、現在のように便利な圧搾酵母など、まだ十分に普及されず、アンパンに代表される菓子パン類は米粃式による家伝の酒種食パンは自家製のホップス種、これがパン種としての最たるものであつた。岸氏は同店で修業中、生地温度の調節方式、水種造りの要領等に興味をもつて銳意研究を続けた。

かくて銀座木村屋での修業を終り、帰郷するとき、栄三郎社長は岸氏に向つていわく、

「君は帰郷すればパン屋を開業するだらうが、そのばあいどの程度の売上げを期待しているか」

「自分は銀座木村屋売上高の一割程度はいけると思う」

すると社長はやや呆れ顔で、
「とんでもないことだ、東京でも年間一万円の売上げを誇るパン屋は、

そうざらにあるものでない」

こんな話から栄三郎社長は岸氏の烈々たる気魄に感銘し、みずから銀座木村屋支店の称号を認証したといふ一挙話もそこに介在し、いまでは銀座木村屋先代社長の姿を偲ぶなかしい想い出話の一つとなつて残されてい

さて岸氏は帰郷後現住地でカネマンベーカリーを開業することになるの

だが、銀座仕込みの技術と「パン試食券」の配布など、岸氏独特の宣伝工作がみごとにあり、開店早々から千客万来で一日平均の売上げ高、九十円から百円にも達するほどの売上げをしめし、栄三郎社長をびっくりさせるほどの繁榮振りをしめた。

このカネマンベーカリーの盛況振りはたちまち若松市内業者間の大評判となり、そのネタも手伝つて、その間若干の問題も起るのだが、その顛末は一応省略するとして、やがて同社のパン類は地元六十五連隊の酒保に納入されることになった。そこには他店との入札額の関係、納入価格の問題等をめぐる若干の確執もあつたようだが、安からう、悪るからう式の入札競争では岸氏の良心が許さず、かれはあくまでも製品本意の指値で軍に入札を認めさせたという一挙話も介在し、業に対するかれの信念がどんなものであつたか、言わず語らずのうちにおのずからよく理解されるものが

ある。

やがて戦時統制経済時代に突入する。この事態に対処するため、昭和十七年八月福島県製パン工業組合が設立される。岸氏は開業以来福島県菓子工業組合員であつた關係から、その現状にとどまることを潔しとせず、菓子の一部門であつたパン部を分離独立し、独自のパン組合を結成する目的で先驅起ち上つた。

これに対し、福島県菓子工業組合専務理事であつた高倉福太郎氏も岸氏の举措に同調し、遂にその目的を達成して、かれは県パン工組の理事に選任された。やがて同組合は福島県麵麪統制組合に移行する。そして昭和二十年初め県パン統は福島県食糧營団に接収される。そのため岸氏は營団職員となり、若松支所長を担当することになった。

やがて終戦後の昭和二十三年、民主化政策の進行とあいまつて、従来の組合を福島県パン商工業協同組合に改組、同時にかれは再び同組合理事に就任する。そして県下パン業界の再建工作に努めるも、次に訪れる麦類の統制撤廃による混乱問題から、昭和二十八年遂に同組合を解散することに

なつた。

かくして昭和二十八年七月十五日、福島県パン食普及協同組合が新設され、県学校給食パン委託加工業務を統轄することになった。岸氏は以来同組合理事長として十五年間その職を担当、県下パン業界発展のため数々の業績を残し、他面全国的にも他にあまり比類をみない立派な組合事務所を設けて組合の財源とし、現在に至つている。

二、県下組合活動の変遷状況

福島県のパンと人のあゆみは、大体以上のことくであるが、しかば県下パン業者間の統轄団体である組合の動き、それは一体どんな曲線を描いて進展したであろうか。試みにその概況を記すと次のとおり。

一、昭和十七年八月十七日

福島県パン工業組合創立、組員合七十九名

理事長 高倉福太郎

専務理事 斎藤 豊後

二、昭和十九年四月一日

福島県麵麪統制組合へ移行

理事長 高倉福太郎

専務理事 斎藤 豊後

三、昭和二十年五月一日

福島県食糧營団第二業務部（麵麪統を接収）

理事長 唐橋 重政

専務理事 会田 邦松

四、昭和二十三年五月一日

福島県パン商工業協同組合結成

理事長 高倉福太郎

専務理事 斎藤 豊後

五、昭和二十四年六月二十四日

福島県パン協同組合に名称変更

◎ 県南部

玉木屋菓子店	鍵清パン店	岩崎繁
古川製菓	江幡トリ	
丸十製パン店	古川正美	
庄司バン店	水野登	
日乃出屋本店	庄司寅吉	
渡辺鉄之助		須賀川
		タタタタタ
河内屋パン店	日乃出屋分店	亀饅パン店
永山清美	服部光明	鈴木甚一
		塩田幸太郎
		佐藤四郎
		岩瀬郡

◎須賀川方部

新製パン店	松葉屋パン店	入山パン店
店	武田製パン店	富塚清喜
阿部パン店	柴原屋パン店	郡山市
ニコニコパン	阿部宗像	大槻太郎
佐々木	宗千代	田村郡
西山昌則	阿部康雄	
武		
越後屋	扇屋パン店	松崎パン店
	渡辺パン店	松崎晴雄
	宝屋パン店	清水パン店
	橋本三五郎	清水五郎
小沼市三郎	柳沼角栄	
	渡辺定男	
"	"	"

◎ 平方部

○相双方部	磐城方部	
原町製パン 横田製パン 水月堂パン 双葉食品 船橋屋菓子店	宮下パン店 皆川パン店 虎屋ベーカリー 梅月堂 新米屋 熊田パン店 和幸 羽根田省定 相馬市	馬上速 皆川幸運 上遠野虎三 高木誉四郎 熊田明寿 小野敬 渡辺パン店 猪俣屋パン 鹿島製パン 高野章一郎 渡辺操 櫛田昌男 市いわき
原町市 双葉郡 川愛屋商店 猪俣屋パン 学校給食研究会 市いわき	国華堂支店 トウシャ製パン フレンドベーカリー 市製パン 梅野屋パン店 鳥日久雄 高木忠治 中田七男 金成正秋 神永保男 渡辺信人 相馬郡	鳥日久雄 高木忠治 中田七男 金成正秋 神永保男 渡辺信人 市いわき
佐藤敬 双葉郡 生駒安男 猪俣屋パン 市いわき	渡辺パン店 高木誉四郎 熊田浅吉 小野敬 梅野屋パン店 猪俣屋パン 鹿島製パン 高野章一郎 渡辺操 櫛田昌男 市いわき	佐藤敬 双葉郡 生駒安男 猪俣屋パン 鹿島製パン 高野章一郎 渡辺操 櫛田昌男 市いわき
市いわき	市いわき	市いわき

四、組合員の創業歴概況
以上一七九名におよぶ組合員の創業歴内記をしめすと次のとおり。

明治年間創業 一名
大正年間創業 八名
昭和十五年以前創業 三五名
同二十年以後創業 一三六名
大体以上が福島県パン業界歴譜の概況である。

三、北陸・中部地方のパン

一、沿革

幕末越後長岡藩でも兵糧パンを焼いたという記録があるが、この地方のパンの拠点は何といつても明治元年開港の新潟であった。

新潟には居留地も設けられ、そこにはイタリヤ人経営のイタリヤ軒もあって、ここではパンが焼かれた。しかし五港のうちもつとも貿易額の少かつたのは新潟港である。したがつてこの土地の食生活洋風化にみるべきものがなかつたとしてもそれは当然というのほかない。

この地方の新潟以外の土地で比較的はやく西洋パン食文化の影響をうけたのは諏訪(長野)、福井、金沢などであつた。諏訪は絹糸、福井は織物で早くから外国と交渉があつたからであり、金沢は北陸地方の軍事、教育の中心だつたからである。

金沢に合資会社の石川屋が誕生して、パン類、干菓子、餅菓子等の製造をはじめたのは明治三八年であつたが、これは明治・大正期北陸第一の規模を誇つたベーカリーであつた。なお明治三十年代には木村屋總本店が新潟の居留地に進出している。

なお金沢に北陸女学校(ミッショニ・スクールが)誕生したのは明治十一年であつたが、ここでもパンがもちいられた。

二、現況

北陸・中部地方のパンの現況はあらまし以下の通りである。